公益財団法人 宮崎県芸術文化協会会報

みやざき芸文協

第126号　令和7年3月28日発行　　題字：黒木淳吉

〈目　　次〉

第27回みやざき文学賞 …… 2
県民芸術祭助成事業…… 6
第34回芸術文化賞 …… 6
会員だより…… 7
県からのお知らせ…… 7
アーツカウンシルみやざきの活動… 8

ホームページアドレス　http://www.miyazakigeibun.jp　メールアドレス　geibunky@miyazakigeibun.jp

フローランテのひな祭り～つるし飾りと竹びな～（写真提供：齋藤登美枝）

生まれ変わる出来事

宮崎県芸術文化協会　評議員
（宮崎県俳句協会副会長・事務局長）
田上　比呂美

十四年前の十一月から一か月余り豪州へ滞在したことがある。旅行だと嬉しいのだが、ワーホリで豪州にいた次男が事故をおこし日本大使館からすぐ来るようにと連絡を受けたからだった。慌ただしく渡豪し、病院併設のレジデンスから次男の病室へ行ったり来たりの生活が始まった。

車を買ってほどなく、シドニーのちょっと南のウロンゴンからメルボルンの農場へ移動する時の事故だった。八時間ほど運転していて、たぶん居眠りでブッシュに突っ込んだ自損事故。そこは事故多発地点で今まで生きて戻った人はいないとのこと。ブッシュの中から這い出てハイウェイを歩き、力尽きて横たわっているところを非番のお巡りさんに見つけてもらい病院へ。そこでは手に負えなく、ドクターヘリでキャンベラの病院へ。脳挫傷、肺挫傷、右顔面の細かい骨折、右の肋骨骨折等。キャンベラは首都だけれど何もない所。国立の行政機関や大使館などはあるが。しかしカンガルーはいた。白黒の可愛い声の鴉と野生のうるさいオウムに癒される日々だった。

頭と肺にドレーンを入れＩＣＵにいた息子は、驚くほど回復が早く二週間で退院。それでも後の検査の為にそれから一週間レジデンスに居た。飛行機に乗れる許可が下りてからは事故処理と荷物取りの為に二泊三日のバスの旅。最後は拠点にしていたウロンゴンのシェアハウスに戻り十日ほどを過ごした。

一か月余りの目まぐるしいほどの出来事で私の考えは大きく変わった。宮崎人に似た豪州人の優しさ、大使館、領事館の人たちの手厚いケア、何よりＳＮＳで繋がった全国の俳句仲間からの励ましの言葉。そしてお巡りさんに「ラッキーボーイ」とハグされた次男の奇跡的な生還。生きているだけでいい。些細なことに拘らず、人を受け入れることが出来るようになった経験。でも、休みの度にサーフィンに出かける次男への懸念はこれからも続く。

令和六年度県民芸術祭　第二七回　みやざき文学賞

○募集結果

今年度の「みやざき文学賞」の応募総数は、五七四点で、昨年度より四二点減少し過去最も少なくなりました。昨年度に引き続き、主婦や無職の方、大学生・高校生から多くの作品が寄せられましたが、大学生・高校生については、本県で国民文化祭が開催された令和三年度と比べると大きくその数が減少しており、近年の減少傾向の要因のひとつと考えられます。

○募集部門

小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳

○作品の募集

八月一日から九月六日までを作品受付期間とし、六月下旬から県・市町村・各学校・報道機関等に募集要項を発送・広報したほか、主催者ホームページにも掲載しました。

○応募の状況

小説　五〇点
随筆　一五一点
詩　九一点
短歌　一一八点
俳句　一一七点
川柳　四七点

○入賞・入選者発表

一一月八日（金）に入賞・入選者を発表しました。

○表彰式及び懇談会

令和七年二月一八日（火）午後一時三〇分から宮崎観光ホテルにおいて、入賞・入選者をはじめ、関係者を招いて表彰式を開催しました。入賞者には公益財団法人宮崎県芸術文化協会から賞状・賞金（目録）が授与され、その後、部門ごとに入選・入賞者と審査委員、運営委員との懇談会が行われました。

○作品集

入賞・入選作品を顕彰するため、作品集「２０２４　みやざきの文学『第二十七回みやざき文学賞』作品集」を令和七年二月に刊行し、入賞・入選者、関係機関等に頒布しました。また蔦屋書店高千穂通店、田中書店（宮崎市）にて一五〇〇円（本体価格）で販売しています。

※作品集を購入ご希望の方は宮崎県芸術文化協会事務局にお問い合わせください。

○入賞・入選者

【小　説】

一席　杉尾　周美　宮崎市
「白衣と敬礼」
二席　有賀　真一　Ｐ　宮崎市
「冬苺」
三席　蛯原　拓也　日南市
「無垢を見上げる」
佳作　ふかみるい　Ｐ　宮崎市
「カラスの鳴いた日」
佳作　鳥海　美幸　都城市
「ツユクサ」
佳作　野々上万里　延岡市
「ハピパピ」
佳作　水上　夏貴　Ｐ　宮崎市
「『すべての花は花だから』」
佳作　図師　幸村　Ｐ　日南市
「片割れ」

【随　筆】

一席　下野　昌代　都城市
「夫は帰ってくる」
二席　有賀　真一　Ｐ　宮崎市
「崎戸の春に」
三席　入谷　美樹　宮崎市
「闘う女たち」
佳作　内窪　敬子　えびの市
「お裾分けです」
佳作　明利三枝子　都城市
「編むとは」
佳作　甲斐　清子　宮崎市
「怪我の功名？」
佳作　太田　悠貴　宮崎大宮高等学校
「幸せであること」
佳作　長田悠華子　宮崎学園高等学校
「いつか来るその日のために」

【詩】

一席　千葉　まほ　Ｐ　延岡市
「ぶどうの実」
二席　多田ゆか理　Ｐ　宮崎市
「寄港地」
三席　甲斐　清子　宮崎市
「終いの着物」
佳作　とみなが秀則　Ｐ　宮崎市
「湖水の花」
佳作　長友　聖次　宮崎市
「傷心」
佳作　金谷　美宙　Ｐ　日向市
「烏」
佳作　加澄ひろし　Ｐ　宮崎市
「風の町」
佳作　小玉　隆　本庄高等学校
「花火は死んで」

【短　歌】

一席　片山佳代子　宮崎市
「真ん中はここ」
二席　喜田久美子　宮崎市
「母」
三席　早日　早貴　国富町
「還暦の母」
佳作　今村　文香　宮崎市
「おっぱいくん」
佳作　稲用　博美　国富町
「風の色」
佳作　甲斐　一成　宮崎市
「明日は晴れますように」
佳作　土井　健　都城市
「盆帰り」
佳作　田中　成尚　宮崎市
「８年後」

【俳　句】

一席　野田　一穂　延岡市
「ミューズ」
二席　岩切　恵子　宮崎市
「サーカス　サーカス」
三席　吉野　松子　国富町
「裏庭」
佳作　上山　育美　延岡市
「涼風」
佳作　山田　裕章　Ｐ　日南市
「時雨」
佳作　森山　淳子　延岡市
「三角波」
佳作　森山　榮子　Ｐ　延岡市
「壺に耳」
佳作　齊藤　豊　宮崎市
「故郷」

【川　柳】

一席　植田のりとし　Ｐ　宮崎市
「老いてなお」
二席　中島　艇祐　延岡市
「２０２４　夏　思い」
三席　金山　二子　Ｐ　宮崎市
「道」
佳作　荘子　隆　宮崎市
「能登復興」
佳作　長友　聖次　宮崎市
「漂流する方舟」
佳作　河野　正　延岡市
「消える」

佳作　桜木　えり　P　宮崎市
「星空のロマン」
佳作　森山　淳子　延岡市
「多作多捨」

※佳作は受付順
※Pはペンネームの略

審査講評

○小説

主題としては感動モノも多くあったが、文章の稚拙さがマイナス点となった作品が多くあった。文章作法（改行など）の修練が望まれる作品が多くあって残念であった。

何を書こうとしているのかわからないまとまりのない作品もあった。

昨年度と比較して「これはいい」と思うことのできる作品はなかったように思う。昨年度より九編多い応募者数となったことは嬉しく思う。

一席「白衣と敬礼」について

昭和一八年の工科学校の学生時の体験～午前中は座学だが午後は軍の下請け工場のような学校であったが、当時の恩師の一人が「木炭ガス発生器」の講義をされた。戦後、その先生の講義を老人大学で受講し、環境問題の先駆けのような立派な授業であることを知る。折から、京都はＣＯＰ３の国際会議が開かれていたという設定。現時点で、過去の戦時をクローズアップした視点が評価された。

戦時中の記述が丁寧で、わかりやすく、読者に伝わりやすい。「私」の眼を通した山根先生の生きる姿に感動がある。

○随筆

高校生、大学生の作品が全体の四六・四％を占めており、こうした若い世代が何を考えて生き、将来どう生きていこうとしているかがよくわかった。一方、二〇代、三〇代、四〇代のいわゆる働く世代の応募が少なく、全体として物足りなさを感じた。

随筆に関しては、一〇代の応募は多かったが、もっと学校で奨励してほしい。

一席「夫は帰ってくる」について

長い結婚生活の中で二度の離婚の危機を乗り越えてきた高齢夫婦の物語である。病弱で入退院を繰り返す夫に作者は疲れ果てるが見捨てることができない。献身的に支え続けた結果、ようやく夫の心の中に妻としての存在感が定着する。感情の起伏を素直にさらけ出し、高齢夫婦の距離感をうまく書いている。

共働きで働き続けて定年退職した高齢夫婦の距離感を今までに瀕した離婚の危機、入院・介護を経験する中での心身の動揺・爆発等を正直に書き表していて読む者の心に迫ってきた。

○詩

全体を通して作品が長かった。ギリギリまで切り詰めてほしい。

一般・学生ともに応募者が減っており、作品数が前年に比べ少ないので、ＰＲや告知をさらに進めてほしい。潜在的な書き手はまだいると思う。

現代の詩に対する理解・関心が不十分である。

一席「ぶどうの実」について

重いテーマに向き合い、剝いた「ぶどう」のイメージが鮮やかである。気づきが新鮮でよく書けているが、少し長いのが難で、もう少し切り詰める必要がある。

筆力は十分である。現代の詩全体への関心をもっと深めてほしい。

○短歌

昨年度よりレベルの高い作品が散見された。単に日常を捉えるだけではなく、表現力のレベルが上がっているように思われる。

家族を歌った連作に印象深い作が多かった。

一席「真ん中はここ」について

独自の感性で桜の開花と散華を歌っている。短歌の伝統で桜が歌われてきたが、桜の花を賞でる新しい歌である。

ことばに工夫、発見があり、作品全体が新鮮である。

○俳句

明確なテーマを設定したもの、四季別、五句を単に並べたもの等、様々な作品、高年齢の人らしい作品が多かった。

少しおとなしい句が多かったように思う。高齢と思われる方の斬新な句もあったが、もっと若々しい、青春性の高い、ユーモアのある作品がほしい。若い人が若い感覚で出してほしい。

一席「ミューズ」について

五句全体が若々しく艶のある句々に惹かれた。

恋や容姿を詠んでいるが瑞々しく感じた。何歳になっても俳句の中では恋もできるし若々しく在れる。

○川柳

年配者が多いせいか、老いる、生きる、生き様、平和と戦争など社会の有様を敏感に捉えていると思う。

テーマに添って起承転結をさせる手法は年々うまく表現されているが、人間詠の深奥のところをもう少し掘り下げて描きたい。

一席「老いてなお」について

寄る年波を客観的に捉え、抗う気持ちを水準の高い表現で詩っている。比喩の出し方が的確。

老いてゆく我が身を淡々と、我かく思えりの感で表現している。平明な作風である作者の意とするところは強く伝わってくる。

懇談会報告

小説部門

運営委員　伊福　満代

小説の審査講評並びに懇話会は、欠席者が多く、受賞者は三名だけの寂しいものであった。だが、渡邉委員の「作者の気持ちが直接聞けるという貴重な場であるので、次の作品に繋がるように意見を交わしていきましょう」との言葉から始まり、活発な意見が飛び交った。特に一席『白衣と敬礼』に登場する山根先生の年齢について、皆が感じていた「年齢があわないのではないか」という疑問に対し、作者の杉尾氏は、山根氏が実は戦時中の爆弾により亡くなっており、主人公が定年後に通い始めた老人大学で見た写真は、主人公にとってはそれが山根先生に見えただけであり、本当は別人である想定であったが、あえてそれを曖昧に、どのようにもとれるよう含みを持たせて表現してみたと答えられた。また、友人の結城に山根先生のことを尋ねた時、山根先生の存在を否定したことについては、憲兵から目を付けられるような発言を山根先生がしていたので、山根先生に関わりたくないという気持ちから結城が知らないふりをしたと説明され、その点は読み手にはわかりにくかったと声が挙がった。前半、実在していた鉄工所が設立した実業学校で学ぶ主人公の訓練の様子が詳細に

書かれていただけに、終盤がファンタジー的印象になり、リアル感が損なわれたように感じて残念だ、という感想が各々からあがっていた。一方で、実体験を書いた作品だと思われていたこの作品が、実際は資料館で見つけた図面から発想を得て書かれたという事実に、あるテーマを元に、過去の記録を調べ上げ、想像しながら当時の出来事を詳細に書き上げるその技術と表現力に感嘆の声があがった。

三席の蛯原氏は、海上に突然赤ん坊の顔が浮かぶという突飛なストーリーについて、昨年の授賞式後に貰った県内の同人誌に掲載されていた、鮒田トト氏の作品に発想を得たと語られ皆が驚いた。みやざき文学賞入賞を機に本格的に小説を書くようになり、様々な賞を受賞し高い評価を得ながらも、病のために夭折した鮒田氏の作品が、今の若い書き手にも影響を与えたことが、まさにこのみやざき文学賞が、次世代に繋がる書き手を育てる場になっている証であろう。

欠席者の作品も一つ一つ、その作品の印象、感じたこと等をそれぞれ出し合い、作品を通して、作品の長所、納得できなかったことなど具体的にとりあげ、かなり詳細に深く掘り下げた懇談会となった。

参加者が少なかったことは大変残念なことではあるが、参加された受賞者の次の作品に大いに期待できる会となったのではないだろうか。

随筆部門

運営委員　福田　稔

今回の随筆部門の懇話会ですが、実は、開始時間になっても入賞・入選者が四人しか集まらず、例年になく寂しいスタートとなりました。しかし、結果的には学びと感動に溢れた充実した時間を過ごすことができました。

会は、審査員と運営委員の紹介から始まり、その後、審査講評が行われました。

まず、古垣隆雄審査員から、応募作品数が一五一あり、六部門で最も多かったとの報告がありました。次に、全般的な助言として、誰かに読まれることを意識して執筆することの重要性に触れられました。例えば、個人的な思い出の羅列だけでは、他人である読者に共感を与えることはできません。また、随筆には真実をありのままに表現するリアリティーがあります。この点が小説との決定的な違いであると指摘されました。今回の懇話会では、この随筆の特性が繰り返し取り上げられました。

山田成美審査員は、多くの作品に宮崎のことが反映されていて、それぞれの作品の素晴らしさがあったと感想を述べられました。また、随筆を書くことは自分史を書くことにつながるので、ぜひ多くの世代（特に働く世代）の人たちに作品を書いてもらいたい。できれば応募に繋がるよう期待していると述べられました。

佳作受賞者への表彰式の後、参加者それぞれに、応募作品に込めた想いや書く際に注意したことなどを語っていただきました。

一席の下野昌代さんは、タイトル「夫は帰ってくる」を考えたときに工夫されたこと、そして、包み隠さず書くことを心がけたと話されました。古垣審査員からは、それが高い評価に至った理由であるとのコメントがありました。

佳作の内窪敬子さん（作品「お裾分けです」）は、作品を丁寧に審査されたことへ感謝され、これからも随筆を書き続けたいと執筆への意欲を語られました。

同じく佳作の明利三枝子さんは、応募作品「編むとは」の誕生秘話を紹介されました。書くきっかけは偶然見たテレビ番組で、日常のちょっとした出来事が広がり、執筆に至ったそうです。

準佳作の恵利清明さんは、芸文協の内藤泰夫・前会長から懇話会への参加を勧められたことがきっかけとなって毎年参加していると、ご自身の学びの一部を紹介してくださいました。今回の作品「ター君の思い出」の執筆においては、プライバシーに配慮しながら話題を厳選されたそうです。

話が尽きることなく懇話会が進み、気づくと閉会時間が迫っていました。参加全員が互いに感謝し合いながらのお開きとなりました。

詩部門

運営委員　後藤　光治

一　出席者

○審査委員　杉谷昭人　谷元益男
○受賞者　千葉まほ　多田ゆか理
甲斐清子　とみなが秀則
長友聖次　金谷美宙　小玉　隆
井口壽則（準佳作者）
※加澄ひろしは欠席
○運営委員　後藤光治　藤﨑正二

二　会次第

(1)審査委員・運営委員紹介
(2)佳作者表彰
(3)審査講評　(4)懇談会　(5)閉会

三　審査講評の概要

谷元委員、杉谷委員から次のような指摘があった。

①書きすぎると説明になって、想像の余地がなくなる。
②展開が分かると面白味がない。分からない部分があっても良い。
③情景だけを書いても詩にはならない。

次に、杉谷委員から次のような指摘があった。

①「私」から「社会」の詩への転換が必要。
②「荒地」の台頭により「現代詩」は難しいという臆見が定着した。わかりやすい詩でも良いが、新鮮さとオリジナリティが必要である。

四　懇談会の概要

最初に自己紹介を兼ねて自身の詩にかける思い等を、一名ずつ述べた。次に、出席者の詩について合評した。以下はその概要。

①ぶどうの実（千葉まほ）
タイトルが良く、リアリティもあるが構成がだぶついたり、不要な説明の箇所が多い。

②寄港地（多田ゆか理）
イメージで読ませる独特の文体。読み違えをさせる箇所もあるが、それも良い。行の区切りの規則性には一考を要する。

③終いの着物（甲斐清子）
「かおり」まで漂うリアリティがあり、情景が浮かんでくる。不用意な言葉も目立つ。

④湖水の花（とみなが秀則）
詩の摑みは抜きんでている。鋭さもあるが、一連のイメージが最後まで繋がらないのが惜しまれる。

⑤傷心（長友聖次）
「まぶた」の捉え方が良い。「傷心」にまでつなげた所は良かったが、第三連、最終連をもっと丁寧に。

⑥烏（金谷美宙）
「醜いアヒルの子」を逆手に取った、思想性の高い詩。よく書けている。「ああ」の詠嘆がマイナスとなった。
⑦花火は死んで（小玉隆）
イメージが鮮明で、比喩も効いている。リズムが不自然であるが、それが技巧であるとしたら、相当の書き手である。

短歌部門

運営委員　杉田　一成

1　参加者
審査委員　伊藤一彦
運営委員　杉田一成　堀越照代
2　受賞者
一席　片山佳代子
二席　喜田久美子　三席　早日早貴
佳作　稲用博美　甲斐一成
土井　健　田中成尚
欠席者　今村文香
準佳作　田爪節子　佐藤さふらん
落合由美子
3　佳作者の表彰
滞りなく伊藤審査員から各入選者に賞状が渡された。
4　審査講評と懇談会
伊藤審査員の進行によって進行。
一席の人から自分の作品を読み、作歌にあたって工夫した点などを発表。二席の人が一席の作品について感想を述べる。
その後、参加者から自由に意見を述べるという形で進んだ。
主な意見を集約すると、
一席　桜の季節を詠んだ秀作。五首目の鍵について結句の「春なり」が効いている。大事な鍵との意見。「ひらがなでよぶこゑ」は幼い頃を工夫した表現。作者は旧かな遣いにしたとのこと。
二席　五首目の「遺されし」でお母さんが亡くなったことを表現。五首連作としては生前のことをのみ表現した方がいいのではとの講評だった。
三席　作者によれば、母へのお礼のつもりで作ったそうだ。五首目の結句、「平日の海」が良いとの評価。気になったのは一首目の韻律。韻は言葉の響き、律はリズム。「リズムもて」が適切との講評。
佳作
おっぱいくん：五首目の空色のブラがしめくくりとしていい。効果的との講評。
風の色：風を四季で色どっている。一首目の出だし「ともすれば」は効果的だとの講評。歌の調べがいいとの意見。
明日ははれますように：水滴ランキング二位は蜘蛛の巣の雨粒。一位は作者によれば虹をつくる水玉とのこと。雨が好きでこの連作となったとのこと。
盆帰り：三首目の「供えり」は、助動詞りの接続が誤り。「供えぬ」が正しいとの講評。五首目は一抹の寂しさと安ど感があるとの意見。
8年後：作者によれば、びわの種をお子さんが植えたとのこと。表現は「まなざしを乗せ」「優しく降りる」の擬人法がよいとの講評。数字は漢字表記か算用数字かとの指摘もあった。まなざしのひらがな標記もいいとの意見もあった。
そのほか、準佳作者の講評もあった。
以上は懇談会の一部である。内容の充実した懇談会だった。

俳句部門

運営委員　池袋　寛

参加者
審査委員（田上・服部）
運営委員（川口・池袋）
受賞者（佳作も含め全員出席）八名
準佳作者（黒木、森下、金子、高草、渡邉、山元）
その他（佐藤、小泉）　以上二十名
進行
1，開会挨拶　司会進行（川口）
2，佳作受賞者表彰（服部→上山他五名）
3，参加者自己紹介
4，審査講評
準佳作者も含め参加者全員の作品の講評（三席までは二名の審査員から、他はどちらか一名のみで講評）
作者による作句意図、他の参加者の感想等
5，懇談会
・連作で作る意味。（テーマをどう決めるか、句の並べ方、作品の揃え方、タイトルの決め方など。）
・新しい俳句への挑戦（型にはまらない自分の俳句をどう作るか。）
6，閉会
・県俳句協会からの案内（俳句人口増加への取り組み、ＮＨＫ俳句「よみ旅」）
感想　多くの同好の仲間、受賞者の友人等の参加もあり、直ぐに和やかに会を進行することができました。参加者からの俳句への日頃の思いをこれからの俳句活性化に生かせたらと思っています。

川柳部門

運営委員　司会　大田ちかよし
記録　伊福　保徳

昨年同様、審査委員と運営委員の自己紹介と挨拶で審査講評と懇談会を始めた。
初めに、荒砂委員の持論でもある、眼前即刻の写生を避け、「我はかく思えり」の詩を探求してもらいたいの一言。吉井委員からは、「人間風詠を一幅の絵に」と力説、言葉遊び的な発想は避け、人間の心の機微を詠い一句のドラマが、一幅の絵になるような創作をとの願望が語られた。
一席は荒砂委員、二席は吉井委員と交互に作品五句を講評、受賞者は自己紹介と、自作五句の思いを語っていただき、今後の抱負もひと言お願いした。
一席、「老いてなお」。昨年は作品名「林住期」で二席を受賞。その続編とも言える「老いてなお」連作の一〇句が出来上がった。何の衒らいもなく、歩いて来た老いの人生を詠い、まだ衰えたくない好奇心で結び秀句へと昇華させている。
二席、「２０２４　夏　思い」。前句の二句で私の悲しみと後悔を語り、結句は連作のまとめとして、脇役はこの世界一人も居ないと言い切り、主役は一人一人であると主張。哲学性を感じる。
三席「道」。起承転結に己の生きて来た道と、これから歩いて行く道を連句に良くまとめている。雑音の無いこの道をゆっくりと違いなく行く決意を結句に誓っている。

佳作の「漂流する方舟」は、今ある地球の数々の危機を詠い、方舟さえも漂流すると警告する。下句「いまだ漂流」に瑕疵があると講評されると、作者もこの「いまだ漂流」に悩んだ事を告白、下句の難点を認めた。

「星空のロマン」は、女性作家の星空に思いを馳せる甘い愛の詩である。可もなく不可もなく星空を材にしている。三句目の「星の数いれどあなたは一人だけ」の「いれど」と「あれど」の推敲の必要性を問う作者に、審査員、会場の誰れにも答はなかった。

準佳作で、懇親会に出席されたのは三名。受賞者との差別なく作品五句、講評された。

残念ながら総合力不足。秀句一句ではなく連作五句の底上げを目指していただきたいのひと言。

残念と言えば、受賞者三名（一人俳句受賞者）の懇親会欠席だった。勉強会でもあるこの懇親会もったいないと思った。

令和六年度の県民芸術祭の採択状況等

県民芸術祭助成事業は、県内の文化団体が日頃の活動成果を発表することにより、県民の文化創造や文化意識の高揚と本県芸術の振興に寄与することを目的に行われるもので、本年度は次の六団体の事業を採択しました。

①宮崎市合唱協会創立三〇周年記念演奏会（宮崎市合唱協会）
②第五〇回記念宮崎市民俳句大会（宮崎市芸術文化連盟）
③女声コーラス　コール・ベル二〇周年記念コンサート（女声コーラス　コール・ベル）
④宮崎市民吹奏楽団創立五〇周年記念第四八回定期演奏会（宮崎市民吹奏楽団）
⑤延岡日本舞踊協会創立六〇周年記念公演（延岡日本舞踊協会）
⑥山門流奎州瓠の会創立四〇周年記念公演（日舞山門流奎州瓠の会）

公益財団法人宮崎県芸術文化協会第三四回（令和六年度）芸術文化賞

公益財団法人宮崎県芸術文化協会では、加盟団体またはこれに所属する会員、その他適当と認める個人または団体で、本県の芸術文化の発展に貢献した者、将来に向けた飛躍が期待できる者に芸術文化賞・芸術文化奨励賞を授賞し、顕彰しています。

【芸術文化賞】

西岡　南風

（宮崎県現代川柳協会推薦）

平成二〇年に宮崎番傘川柳会会長、平成二七年に宮崎県現代川柳協会会長に就任。また、「国民文化祭二〇二〇みやざき」では「川柳の祭典」の実行委員長を務めた。さらに県内各地の川柳吟社をまとめ、宮崎県現代川柳協会を設立した功労者でもある。このほか、「川柳みやざき」の編集人、「みやざき文学賞」の審査委員を務めるなど、永年にわたり本県の川柳の普及・指導に努め、その質の向上に尽力した。

長友　巖（宮崎県俳句協会推薦）

昭和四一年の宮崎県俳句協会の設立に尽力し、その副会長、会長を務めたほか、「みやざきの俳句協会創立五〇周年記念誌」などの編集・発行に力を注いだ。また、平成二五年以降、俳句集団「錆俳句会」の代表、俳句誌「錆」編集人として俳句作家の育成に努めるとともに、令和四年、小島静鄰の業績をまとめた「小島静鄰全句集成と俳句人生」を刊行するなど、永年にわたり本県の俳句文芸の普及と発展に尽力した。

※今年度の芸術文化奨励賞の授賞者はいませんでした。

芸術文化賞を受賞して

宮崎番傘川柳会　西岡　洋三（南風）

私ども「宮崎番傘川柳会」は、初代会長本田南柳さんが「川柳は文芸の一つの形態であり、駄洒落や落ちの芸のみにとどまるものではない。」と位置づけ、長い間、宮崎の現代川柳をリードし、発展させてきました。

私の雅号である「南風」の「南」は、「南柳さん」からいただいたもの。先輩たちの風を忘れずに、間瀬田紋章さんをはじめ多くの柳友と共に学び続けてきました。今改めてその日々を振り返ってみると、私ひとりでは到底続けられないことだったと思っています。この川柳会の活動に尽力されている紋章さんを中心に、ますます発展していくことを祈るばかりです。

今回、栄えある賞をいただき、心から感謝しております。ありがとうございました。これからも心映えする日々を過ごしていきたいものです。

新年の鐘の音ひびくみなみかぜ

芸術文化賞受賞に思う

宮崎県俳句協会顧問　長友　巖

卒寿を迎えた昨年、はからずも第三四回芸術文化賞を頂きました。感謝申し上げます。

私が俳句を始めたのは中学生の頃。戦後の混乱期ながら、疲弊した暮らしの中に芸術文化活動を取り戻そうと皆が懸命に取り組んだ時代でした。

幸い私たちの町には優れた俳句指導者がおられ初めて句会に参加、高校では文芸部に。日々の暮らしは大変ながら、充実した青少年期を送りました。あれから七〇余年、ほぼずっと「俳句が人生の友」です。

私の青年期は宮崎県俳句協会設立に関わり、年を重ねてからは、生活の大部分を自身の研鑽のため、俳句団体進展のため、協会運営や錆俳句会等の活動に邁進しました。

これから年齢的にやれることは限りあること。もう十分にやってきたとの自負の一方、じっとしておれない自分がいる感覚もあります。限られた時間ながらワクワク感に支えられて、今少し頑張ればと心しています。

会員だより

宮崎県吹奏楽連盟の活動状況

理事長　櫻井　和也

宮崎県吹奏楽連盟は、吹奏楽及び管・打楽器による音楽の普及・向上と芸術文化の発展に寄与し、加盟団体相互の親睦を図ることを目的として活動しています。今年の活動状況をご覧いただき、それぞれの事業の特徴を知っていただきたいと思います。

★夏　【吹奏楽コンクール・小学生バンドフェスティバル（ステージ部門）】

七月　於：宮崎市民文化ホール　小学生二団体、中学生七六団体、高等学校三二団体、大学二団体、職場・一般五団体、計一七七団体が五日間にわたって音楽の表現力と演奏技術を披露する連盟最大のコンテスト。

★秋　【マーチングコンテスト・小学生バンドフェスティバル（フロア部門）】

九月　於：早水公園体育文化センター　演奏しながら集団演技で魅せる吹奏楽ならではのコンテスト。小学生は自由なパフォーマンスで音楽を魅力的に表現します。

★初冬　【アンサンブルコンテスト】

一二月　於：新富町文化会館　三人～八人という小編成で、音楽表現と演奏技術を高めるための合奏の基礎を学ぶためのコンテスト。一一九チームが出演。

★冬　【吹奏楽コンクールWinter Cup】

一月　於：小林市文化会館　中・高校生それぞれ一・二年生だけの新チームによるコンテスト。コロナ禍で演奏を披露する機会が激減した際に子供たちに発表の場をつくろうと始めた事業で今年度が三回目。

★春　【吹奏楽ドリーム】

三月　於：宮崎市民文化ホール　県内六支部の選抜バンドや合同バンドが単独では味わえなくなった大編成の豊かな響きを楽しみながら発表する音楽祭。高校生は選抜バンドでレッスンを受けながら一年かけて大曲を披露。社会人も祝祭バンドを組んで大人の演奏を披露。吹奏楽愛好者が一堂に会し、たっぷり吹奏楽の魅力を味わう日になります。

他にもクリニックやどの事業も毎回多数の団体が参加するので運営にもたくさんの人数が必要ですが、仕事や年齢の垣根を越えて和気あいあいと楽しく活動しています。

小学生バンドフェスティバル（フロア部門）

吹奏楽ドリーム　高校選抜バンド＋社会人バンド

宮崎県音楽協会の活動状況

会長　島津　陽亮

本協会は、県内の音楽学習者の学習意欲の高揚を促し音楽教育の向上・発展に寄与する事を目的として、昭和二五年に設立され昭和四四年から公益財団法人宮崎県芸術文化協会に加入いたしました。

主な活動内容として毎年七～八月にかけて「宮崎ピアノ・ヴァイオリンコンクール」を開催しています。当コンクールは昭和四二年、「宮崎ピアノコンテスト」として産声を上げました。まだ一般家庭のピアノ学習者は少ない頃でしたが、昭和五三年には名称を「宮崎ピアノコンクール」に変え、出場者の皆様の熱意により県内を代表するピアノコンクールとして定着してまいりました。平成二四年より新たにヴァイオリン部門を創設し、「宮崎ピアノ・ヴァイオリンコンクール」として今日に至ります。

当コンクールの特長としては、幼児から大学・一般の学習者、また大人のアマチュア部門まで様々な年代の出場者を募り、課題曲には主に楽器演奏の基礎となる練習曲やクラシック曲を出題し、ピアノ部門の高校生以上とヴァイオリン部門の大学生以上については自由曲での審査を行っています。各部門の優秀演奏者にはそれぞれ最優秀賞・優秀賞・奨励賞などが贈られ、出場者の大きな励みとなっています。

令和六年度に迎えた第四六回にはピアノ部門とヴァイオリン部門合わせて一〇〇名以上が出場し、それぞれの日頃の練習の成果が発揮された素晴らしい演奏を披露されました。また、前年度の最優秀賞受賞者による特別招待演奏は、毎年当コンクールの終盤を盛り上げ、出場者の良い学習の機会であると同時に来場の皆様の楽しみのひとつとなっています。

○令和七年度「第四七回宮崎ピアノ・ヴァイオリンコンクール」

ピアノ部門
予選：八月一日（金）
本選：八月二一日（木）（いずれも宮崎市民プラザ　オルブライトホール）

ヴァイオリン部門
予選：七月六日（日）（西村楽器大淀店）
本選：七月三一日（木）（宮崎市民プラザ　オルブライトホール）

県からのお知らせ

第三〇回宮崎国際音楽祭の概要

今回で第三〇回を迎える宮崎国際音楽祭は、四月二〇日から五月一八日までの二九日間、リニューアルした県立

芸術劇場において、三浦文彰氏を音楽監督に迎え、新たな歴史の幕開けとなる音楽祭を開催します。
皆様の御来場を心よりお待ち申し上げます。

○期間　令和七年四月二〇日（日）～五月一八日（日）

○会場　メディキット県民文化センター（県立芸術劇場）ほか

○主なプログラム

演奏会〔1〕三浦文彰×辻井伸行Ⅰ「新しい地平へ」～最強の二人と仲間たち
日時：五月三日（土・祝）一五時開演

演奏会〔2〕三浦文彰×辻井伸行Ⅱ「空から降る音色」～奇蹟のデュオ・リサイタル
日時：五月四日（日・祝）一五時開演

演奏会〔3〕宮崎国際音楽祭×東京藝術大学『四季』～AIによる音楽と映像の共演
日時：五月一〇日（土）一七時開演

演奏会〔4〕ピアニスト　チョン・ミョンフン「自らの内なる音を聴く」～究極の室内楽への旅
日時：五月一五日（木）一九時開演

演奏会〔5〕マエストロ　チョン・ミョンフン「ブラームスの殿堂」～協奏曲と交響曲の大伽藍
日時：五月一七日（土）一五時開演

三〇周年記念演奏会「苦悩を突き抜け歓喜にいたれ」～三〇年を音祝ぐ
日時：五月一八日（日）一五時開演

ストリート演奏会「完熟☆金管五重奏団」
日時：四月二〇日（日）時間未定
会場：宮崎県庁五号館前広場（雨天時はオルブライトホール）

シリーズ「Oh! My! クラシック」「夢は見るものではなくかなえるもの」～澤穂希のサッカー人生と音楽～
日時：四月二七日（日）一五時開演

三浦文彰が解き明かす「室内楽の秘密」
日時：四月二九日（火・祝）一五時開演

サテライトコンサート in えびの「NADESHIKO弦楽八重奏団」
日時：五月二日（金）一九時開演
会場：えびの市文化センター

気軽にクラシック「500円コンサートの日」
日時：五月六日（火・振）

シリーズ「ポップス・オーケストラ in みやざき」〝ひこうき雲〟〝時代〟から半世紀～二人が開いたJポップの華麗な世界
日時：五月一一日（日）一五時開演

○お問い合わせ先
宮崎国際音楽祭事務局
（公益財団法人宮崎県立芸術劇場）
電話　0985（28）3208

○チケット取り扱い（一般発売三月一日～（一部公演を除く。））
メディキット県民文化センターチケットセンター
電話　0985（28）7766
ほか、各プレイガイドにて販売しております。詳しくは、メディキット県民文化センターホームページを御覧ください。

令和六年度 アーツカウンシルみやざきの活動を振り返って

プログラムディレクター　山森　達也

二一〇〇年の日本は、人口が六三〇〇万人、そのうち高齢者の割合が四〇％という予測があります（二〇二四年人口戦略会議より）。その頃の宮崎県は、人口が四〇万人を切り、その半分以上が高齢者と予想されています（二〇二二年宮崎県長期ビジョンより）。二一〇〇年というとまだ先に見えますが、七五年後の未来です。これを書いている私も、読まれている皆様もたぶんだれも見ることができない未来ではありますが、今年生まれてくる子どもたちが確実に見るであろう未来でもあります。

今年、アーツカウンシルみやざきは六年目を迎えました。コロナ禍、国文祭・芸文祭を経験し、宮崎県文化振興条例が制定され、昨年度にはみやざき文化振興計画が策定されました。アーツカウンシルみやざきにはこれまでに一〇〇〇件を超える相談が寄せられ、二〇〇件以上の助成に携わってきました。この盛り上がりは二一〇〇年まで続くのでしょうか。

文化芸術とは個人の所有物ではなく、過去・現在・未来にわたって続いていく人類の遺産だと思います。文化は人の命よりも永く、誰かが受け継いできたものを未来に渡していく行為そのものです。目の前のことばかりではなく、その先にある未来のために、二一〇〇年に宮崎の文化は生き残っているのか、二一〇〇年に宮崎は文化で生き残れるのかをテーマに今後も活動してまいります。

編集後記

「すべての植物には名前がある」と言ったのは植物学者牧野富太郎氏だとか。

だが、最初（はじめ）に名前ありきではない。植物に限らずすべてのモノに名前が無かったら、世の中不便なこと極まりない。

だから後に人が命名したのです。

特に人名は単なる記号ではありません。個人を識別する象徴です。権利も義務も有する姓名は、人格が保障されるか否かの、重大な意味を持っています。

近年、女性の自立・労働参加、また多用な生き方と、成熟した社会は既成概念だけでは計り知れないものがあります。

姓名によって差別や不利益があってはならないことです。

名前は時代を反映します。キラキラネーム、ジェンダーレスの「名」も大切ですが、今、「姓」のあり方について思いを廻らせています。

（宮崎　良子）

みやざき芸文協　第126号
令和7年3月28日発行
編集・発行
公益財団法人 宮崎県芸術文化協会
〒880-0804
宮崎市旭1丁目2番2号 宮崎県企業局2階
TEL 0985-31-2780　FAX 0985-31-2782
https://www.miyazakigeibun.jp/deliverables/
こちらのQRコードからもご覧いただけます
印刷所　鉱脈社